

韓国語習得における主語と目的語をマークする 助詞と項の省略の非対称性について

——統語的な操作から機能的な操作への発達過程の検証——

齊藤信浩

1. はじめに

言語類型論は、世界のどの言語においても主語の表示の仕方に違いはあるにせよ、主語それ自体は存在し、主語のない言語というのは存在しないことを明らかにした (Greenberg 1966, Comrie 1981)。典型的には、中国語、日本語、韓国語などは主題卓越型 (Topic prominence: TP) 言語に分類され、英語・フランス語・スペイン語などは主格卓越型 (subject prominence: SP) の言語であるとされる (Li & Thompson 1979)。

SP言語の中には主語 (NP1) を省略できるスペイン語、イタリア語、ギリシャ語などのような言語もあれば、NP1を義務的に表示しなければならない英語、フランス語のような言語もある。¹ これに対して、TP言語である中国語、日本語、韓国語には主語 (NP1) と目的語 (NP2) の省略現象があり、イタリア語などとは異なった省略現象がある。

- (1) * (I) eat lunch in the restaurant.
- (2) (io) Mangio il pranzo al ristorante.
- (3) (我) 在 餐廳 吃(飯)
- (4) (私は) レストランで(昼食を)食べる。

¹ 英語は主語省略の出来ない言語であるため UG 理論では pro 落としのパラメータはマイナスに設定される ([-prodrop])。日本語は主語省略が出来る言語であるため、パラメータはプラスに設定される ([+prodrop])。

- (1) I went to school yesterday.
- (2) 昨日 PRO 学校へ行った。

齊藤信浩

これら(1)から(4)の例は項の省略を示したものであるが、日本語や韓国語の場合、項に付属する助詞(後置詞)の省略現象もある。L1の習得の際に、Yuan(1994)、Wakabayashi&Negishi(2003)、Park(2004)はNP1とNP2の項のうちNP2の習熟度が低く、非対称的な習得関係があると論じ、Otsu(1994)、鈴木(2000)、Cho,et.al(2002)は、NP1をマークする主格助詞(NOM)よりもNP2をマークする対格助詞(ACC)の習熟度が低く、ここにも項と同じ非対称性が存在することを明らかにしている。単文レベルで観察されたこのような統語的な日本語と韓国語の特徴に対し、Hinds(1983)、Hwang(1983)は、日本語、韓国語は連続的な発話の際に、NP1をマークする助詞がトピック維持のために可変的に使用されるとし、統語的な範囲を超えた機能的な観点からNP1+助詞を分類した。Nakahama(2003)はL1におけるそれらの伝統的なモデルを実証的に記述した。

本稿はこのL1で明らかになった統語レベルでの項と助詞の非対称性がL2としての韓国語習得の際にも発生するかどうかを検証し、その統語的な非対称性と、統語レベルを超えた機能的な助詞の使用の関係性を初級段階で学習者がどのように習得していくかを考察するのが目的である。

2. 先行研究

Yuan(1994)は、中国語母語話者(CNS)の英語習得の際に、NP1よりもNP2の習得が遅れ、英語のNP2を脱落させてしまう傾向があること、CNSにはNP1とNP2の間に理解の差があることを観察した。同様に、日本語母語話者(JNS)の英語習得に関する研究では、Wakabayashi&Negishi(2003)が、韓国語母語話者(KNS)の英語習得に関してはPark(2004)がYuan(1994)と同じくNP1とNP2の非対称的な習熟度があったことを観察している。TP言語である中国語、日本語、韓国語の間には共通してNP2に揺れが存在する。

Yuan(1994)、Wakabayashi&Negishi(2003)、Park(2004)は英語習得に関するL2の研究であったが、L1としての日本語や韓国語の研究においてもNP1とNP2の間に非対称的な関係が存在し、後置詞体系を持つ日本語や韓国語の場合、NP1とNP2をマークするNOMとACCに関して、NP2のACCは脱落しやすく、NP1のNOMは脱落しにくいということを検証している(Otsu 1994、鈴木 2000、Cho,et.al 2002)。Yuan(1994)、Wakabayashi&Negishi(2003)、Park(2004)はNP1、NP2という項の省略を対象にし、

Otsu (1994)、鈴木 (2000)、Cho, et. al (2002) は NP1、NP2 に付属する助詞を対象にして研究したものであるが、L1 として日本語と韓国語を習得する際には NP2 (項・ACC) の習得が NP1 (項・NOM) の習得より困難なようである。斉藤 (2006a) は JNS の L2 としての韓国語習得を調査したが、ここにも NP2 をマークする ACC に大きな揺れが存在した。

Otsu (1994)、鈴木 (2000)、斉藤 (2006a) は、助詞を用いる TP 言語 (日本語、韓国語) の話者が特に NP2 にゼロ (φ) 助詞を使用するという統語上の非対称性を発見したが、φ 化を単なる脱落と位置づけて分析したものであり、φ 化が有意味に機能的に使用されているという観点からの研究ではない。ここではあくまで統語的な観点から NP1 と NP2 の間に非対称性が存在することを記述したのみであった。これらの UG 理論に基づいた統語的な研究は、主語省略に関する経験的な記述を残すことに貢献したが、UG 理論の側からも、Huang (1984) はスペイン語と中国語の主語省略の違いを“文脈や談話的な機能が主語省略に関わってくる”という談話本位・文本位パラメータを立てて分析し、SP 言語と TP 言語の違いを分析しているが、文脈や談話などの機能的な要素が関わってくるという主張はそれ自体が統語的な観点からの分析の限界を示している。

Hinds (1983) は日本語の NP1 を表示する「が (NOM)」「は (TOP)」「φ」が付いた NP1 + 助詞の使用を機能的に分類し、発話の中で、同一のトピック (話題) が連続する間は初出の言及では NP1 + 「が」を用いるが、2 度目の言及では NP1 + 「は」を用い、更に連続的な言及では助詞は省略され、NP1 + φ になり、最終的には NP1 の項自体が省略されてゼロ化するという構造的な助詞の使用変更の現象があることを主張した。² Hwang (1983) は Hinds (1983) と同様に、日本語と類似した語順と後置詞体系を有する韓国語においても、主格助詞「가/이 [ga/i] (NOM)」、主題助詞「는/은 [nun/un] (TOP)」、「φ」が同一のトピック内で連続的に使用される場合、日本語と同じ現象が存在すると記述している。Nakahama (2003) は、Hinds (1983) の「NP1-が」→「NP1-は」→「NP1-φ」と Hwang (1983) の「NP1-가/이 (NOM)」→「NP1-는/은 (TOP)」→「NP1-φ」という NP1 + 助詞の連続的な使用に関するモデルを実証するために、JNS と KNS を対象に L1 としての使用実態を調査した結果、Hinds (1983) と Hwang (1983) のモデルを支持する結果を得ている。更に中浜 (2004) では英語母語話者 (ENS) が日本語を L2 として習得する際に

² Clancy & Downing (1987) は、NP1 + 「が」が 2 度目の言及で省略され、NP1 + 「は」が必ずしも「が」の後続で出現するわけではないという Hinds (1983) の伝統的なモデルに反する結果を得ているが、Nakahama (2003) ではトピックが連続的に展開していく場合、Hinds (1983) と同様の結果が得られている。

齊藤信浩

Hinds (1983) のモデルと合致するかどうかを検証した結果、ENSのL2としての日本語においても、熟達度が上がるにつれて、目標言語であるJNSと同様の使用に推移していくことを観察している。

これらの統語的な記述と機能的な記述をまとめると以下、表1、表2のようになる。

表1 統語的な記述—各言語による項と助詞の省略現象—

	日本語／韓国語	中国語	スペイン語	英語
項の省略	NP1<NP2	NP1<NP2	NP1	—
助詞の省略	主格<対格	—	—	—
	談話本位	談話本位	文本位	文本位

表2 機能的な記述—Hinds (1983) のモデル—

	初出		2 回目の言及		連続した言及		連続した言及
使用順序	NP1-NOM	→	NP1-TOP	→	NP1-φ	→	φ

このようなトピックの管理に関する研究では助詞の省略がトピックの維持・連鎖のために「は」が使用されたり、φ マーカーになったり、項が省略されたりということが観察されたが、表2のような機能的な使用は初級段階では使用が困難であったという報告が先行研究(Yanagimachi 2000、中浜 2004)などにおいてもされている。1つの文中における項省略と助詞省略という複雑な統語操作をどのような過程で習得していくのかという問題は、この構文的な操作は言語の機能的な特徴の習得が普遍的な構造の発達をもって進んでいくという主張(Givón 1983、Fuller&Gundel 1987、Chaudron&Parker 1990)や、転移であるという主張(Huebner 1983a、Rutherford 1983、Jin 1990)だけでは説明できない。統語的な操作の習得と機能的な操作の習得の両方が関連しあっていると考えられる。SP→TPの習得、TP→SPの習得の際には、類型的な差が存在するため、転移の他にも様々な要素が介入しそうであるが、TP→TPの習得の場合、L1に近い言語運用が観察されそうである。本稿はTP言語の中で検証が殆どされていないJNSのL2としての韓国語習得を題材に、(1)主格(NOM)・主題(TOP)・対格(ACC)の省略の非対称性が起こるかどうか(助詞の省略)、(2)NP1とNP2の省略の非対称性が起こるのかどうか(項の省略)を考察するとともに、(3)その習得順序を検証し、その中で統語的な操作の習得と機能的な操作の習得の発達関係を記述していきたい。

3. 調査概要

本稿では名古屋市内の全日制高校で開講されている韓国語の授業を聴講している

韓国語習得における主語と目的語をマークする助詞と項の省略の非対称性について

JNSの高校生を被検者として、TP言語話者であるJNSが同じTP言語である韓国語を習得する際に、どのような習得過程を辿るのかを考察する。

この授業において学習者は週に1日、1コマ50分を連続して2コマ受講するので、週当たりの学習時間は100分となる。4月に開講し、1学期にハングル文字、挨拶表現、基本的な文型の導入があり、2学期も基本的な文型を用いて口頭練習や作文練習が行なわれる。調査開始の10月時点では自己紹介、私の部屋、家族などのテーマについて、簡略な文章・表現ではあり、また表記や単語の誤用は多いものの、パラグラフを作成することができるようになっている。但し、作文の能力に比して発話・聴解能力は著しく低い。本研究では被検者20名を対象にテーマを与えて自由作文形式で韓国語文を産出させ、その中に現れた他動詞文³の主語(NP1)と目的語(NP2)および主格助詞「가/이[ga/i]」(NOM)、主題助詞「는/은[nun/un]」(TOP)使用、対格助詞「를/을[rul/ul]」(ACC)使用、助詞省略(φ)に関するデータを収集し、その使用比率を集計した。調査は2005年10月から2006年2月まで2ヶ月ごとに3回行われた。

まず、被験者の韓国語能力の均一化を図るため、2005年10月に実施した中間テストを基準にし、点数の階級が60点～89点の間に納まる被験者を調査対象として絞り、この被検者に、30分の時間を与え、「習慣」というテーマで白紙を配布し作文をさせた。この間、教科書の索引の単語集を参照することは許可した。

表3 平準化テスト

	対象	テスト成績の各階級の人数							平均点
		100-90	89-80	79-70	69-60	59-50	49-40	39-	
午前クラス	36名	1	5	4	5	3	7	11	53.0
午後クラス	32名	1	1	2	6	5	3	14	46.8

4. 調査結果

調査結果は、表4のようになる。他動詞文におけるNP1とNP2の項と、主格・主題・対格・φの助詞のパターンとしてはA～Lまでの12種類が想定される。それ以外のパターン

³ 授業で導入されている他動詞には「먹어요(食べる・飲む)」「봐요(見る)」「들어요(聞く)」「써요(書く)」「읽어요(読む)」「사요(買う)」などがある。その他、学生から必要な動詞や表現が求められた際には、個別に単語で与えた。

日本語の「する動詞」に当たる「하다動詞」は既習だが、「를/을[rul/ul]」(ACC)の用い方が日本語のように「勉強する」ならば自動詞になり、「勉強をする」ならば他動詞であると考えなければならず、他の他動詞とは異なるため、本稿の分析からは除外した。

齊藤信浩

はその他に含めた。逆接「하지만(しかし(けれども))」、累加「그리고(それから)」、理由「그러니까(だから)」などの接続詞は既習であるが、複文は導入されておらず、単文と接続詞を使用したパラグラフが作成されている。各学習者ごとの平均算出文数は調査1では6.61文、調査2では5.73文、調査3では6.26文であった。

表4 NP1+NP2+Verbの型(%)

	NP1+NP2の型		調査1 10/20	調査2 12/8	調査3 2/2
A	NP1-TOP(는)	NP2-ACC(를)	24.9	33.6	37.7
B	NP1-TOP(는)	NP2-φ	24.9	6.6	10.0
C	NP1-TOP(는)	φ	0	0	0
D	φ	NP2-ACC(를)	0	0	17.0
E	φ	NP2-φ	1.7	4.8	26.4
F	φ	φ	0	0	0
G	NP1-φ	φ	0	3.2	0
H	NP1-φ	NP2-φ	8.3	1.6	0
I	NP1-φ	NP2-ACC(를)	1.7	0	1.9
J	NP1-NOM(가)	NP2-ACC(를)	8.3	11.2	0
K	NP1-NOM(가)	NP2-φ	21.7	14.4	7.0
L	NP1-NOM(가)	φ	0	6.6	0
	その他		8.3	16.4	0

5. 分析

5.1. 後置詞の省略現象に関して

主語にあたるNP1に助詞NOM、TOPが付くパターン(A/B/C)、J/K/L)が各回平均66.2%という圧倒的な使用率だったのに対し、助詞が付かないNP1-φ(G/H/I)のパターンは殆どなかった(各回平均5.6%)。その一方で、目的語のNP2の格表示をφ化させるパターン(B/E/K)は多く観察された(各回平均16.1%)。このNP1+助詞とNP2+φという助詞使用の主語と目的語のマークの非対称性に関する結論は先行研究のOtsu(1994)、鈴木(2000)、齊藤(2006a)と一致し、NP1-NOM/TOP > NP2-φという構造的な助詞省略の非対称性があることが観察された。

例1は調査1からのものであるが、ここでは学習者は「저는(私は)」という1人称を文ご

とに出現させている。一部では文が連続した際にNP1を省略させているが、本来の日本語からの文構造の転移があるのであれば、「저는(私は)」という1人称は後続文では不必要であるから(例3、例4 後掲)、過剰産出されていると言える。

同時に、「밥(ご飯)」「신문(新聞)」「TV(テレビ)」「음악(音楽)」のようなNP2をマークする対格助詞が全て脱落しており、上述したNP1-NOM/TOP > NP2- ϕ という構造が典型的に観察される例であるといえる。

例1 (調査1) NP1-TOP + NP2- ϕ のパターン

저는	매일	밥	먹어요.		
私は	毎日	ご飯 ϕ	食べます		
저는	매일	학교에서	공부해요.		
私は	毎日	学校で	勉強します		
저는	신문	안	읽어요.	하미만	TV
私は	新聞 ϕ	読みません	しかし	_____	テレビ ϕ
저는	가끔	쇼핑에	가요.		
私は	たまに	買物に	行きます		
저는	언제나	음악	들어요.		
私は	いつも	音楽 ϕ	聞きます		

習得に際して、NP1-NOM/TOP > NP2-ACCという非対称性が存在する理由として、NP1には人称が入るため定型化し易く、NP2は目的語であるため様々な情報が入り、定型化しにくいと考えられる。つまり、学習者はNP1に助詞のついた形式は1人称であれば「제가(私が)」「저는(私は)」の2つのパターンを覚えさえすればよく、そのために初級段階においてもNP1-NOM、NP1-TOPは困難ではなかったという可能性が考えられる。また、助詞を省略した「저(私)」だけで文を開始するのは不自然であるというL1にも共通する使用を意識していたために助詞が省略されなかったということも考えられる。恐らくこの2つの理由が関連しあって、NP1-NOM/TOPの形式が過剰産出されたのであろう。

Hinds (1983)でのトピックの連続による主題マーカ-の後のゼロマーカ-化は確認できなかった(表2参照)。これは書き資料であることが最大の理由であるが、斉藤(2006a)では導入段階からNP1-NOMをゼロ化させずに使用する習得過程が観察されている。恐らく、初級学習者は、トピックの連続を意識しようとしまいと、NP1に複数の助詞を使い分ける能力はなく、定型化した形での産出しかできないのではないかと考えられる。⁴

⁴ 本稿の調査は初級の不完全な L2 としての韓国語産出を題材にしている。従って、Hinds (1983)、Hwang (1983)の枠組みを否定する結果になったとは言えない。しかしながら、母語とパラレルな構造

5.2. NP(項)の省略現象に関して

項が省略され、片一方のNPが存在するパターンとしては、C、D、E、G、Lがあるが、NP1+NOM/TOP+φのパターンであるCとGとLは一貫して発生しなかった。これは、NP1はトピック化されやすいのに対して、NP2はトピック化されにくく、NP2を表示しないでNP1のみを表示するという文自体が発生しなかったためだと思われる。事実、DとEのパターンは遅れてから発生したが、CとGとLのパターンは一貫して殆ど発生しなかった。

調査1、調査2の段階ではNP1もNP2に関しても、助詞の揺れや省略はあるものの、両方の項が省略されず、NP1、NP2の両項を明示した完全文の形式で産出されている。NP1が省略されるφ + NP2-ACC(D)のパターンは調査1、2に遅れて調査3の段階で発生し多用されるようになる。項としてはNP1は省略されやすいが、NP2は省略されていないことが観察される。これはNP1の方がトピックとして固定しやすく、NP2はトピック化しにくいことが原因ではないかと考えられる。例1では「저는(私は)」というNP1は連続性をもって産出されているが(しかし省略はされていなかった)、NP2の「밥(ご飯)」「신문(新聞)」「TV(テレビ)」「음악(音楽)」は各文ごとに出現する新情報であり、そのNP2がトピック化されて、後続文に連続することが少ないためではないかと思われる。

以下の例2は調査2からのものであるが、調査1の時点よりも1人称の省略が多く発生しているものの、動詞が変わるごとに1人称が再使用されている。即ち、学習者がトピックの連続を意識した形跡が見られる。

例2 (調査2) NP1-TOP + NP2-φ と φ + NP2-ACC の混在したパターン

저는	언제나	밥	먹어요.	하지만	빵	안	먹어요.
私は	いつも	ご飯	食べます	しかし	パン	を	食べません
저는	매일	TV	봐요.				
私は	毎日	テレビ	見ます				
저는	가끔	카나야마에	가요.	그리고	사카에	에도	가요.
私は	たまに	金山に	行きます	そして	柴	にも	行きます
하지만		지쿠사에	안	가요.			
しかし		千種に	行き	ません			
언제나		CD	를	들어요.			
いつも		CD	を	聞きます			
저는	가끔	잡지	을	읽어요.	하지만	소설	은
私は	たまに	雑誌	を	読みます	しかし	小説	は
						読み	ません

を持った言語を L2 として学習する際に必ずしも L1 で可能な操作が転移するわけではないことは観察された。

ここでは、「먹어요 (食べる)」「봐요(見る)」「가요(行く)」「들어요(聞く)」「읽어요(読む)」という5つの動詞が用いられており、1つの動詞によって記述されるトピックが変更され、次の動詞に移行する際に再び1人称が用いられている。L1の日本語の操作とは異なった使用がL2の韓国語に現れている。

5.3. NP1 と NP2 の習得順序

5.3.1. 各項目ごとの習得順序

調査1から調査3までにおける各項目ごとの習得順序を記述していく。まず、5.1、5.2で述べたように、NP1-NOMとNP2-TOPの習得はNP2-ACCよりも先に達成されていると言える。⁵ NP2-ACCとNP2-φの習得はNP2-φの方が先で、それに遅れてNP2にACCをマークすることが可能になって来ている。

NP1-φのパターンがいつ発生するかは、このデータからは帰納できず、そのため、NP1-φの発生時期は予測になってしまうが、NP2-ACCの操作よりは早く、NP2-φの操作よりは遅いのではないかと考えられる。理由としては、NP2の習得よりもNP1の習得が先行しており、NP2にACCをマークするよりはNP-φの操作の方が容易なのではないかと予測する。

NP1の省略は調査1、2では少なかったが、調査3で顕著になった。NP2の省略は5.2で述べたように、NP2はトピック化されにくいいため、本稿では殆ど観察されなかった。習得が進んだ段階で可能になってくると思われる。各項目の習得順序は次のようになると思われる。⁶

NP1-NOM > NP1-TOP > NP2-φ > (NP1-φ) > NP2-ACC > NP1 省略 > (NP2 省略)

5.3.2. 各文型ごとの習得順序

各文型ごとの習得順序を記述していく。まず、調査1において、最も多い型はNP1-NOM + NP2-φ transitive verb (K)とNP1-TOP + NP2-φ transitive verb (B)の型

⁵ NP1-NOM と NP1-TOP の順差は導入順序の影響や日本語との音価の類似なども原因として考えられるが、斉藤(2006a)では主格助詞の導入が先であったため、ここではNP1-NOMを先に配列した。

⁶ NP1-φとNP2省略の現象は本稿のデータからは帰納的に証明できず、予測として言及したためここでは()で記載した。

齊藤信浩

であり(46.6%)、このようにNP1に助詞が付属し、NP2のマーカ―が脱落するという型が初期の段階では最も多い型であると言える。

次いで、調査2の段階ではNP1-TOP + NP2-ACC transitive verb (A)とNP1-NOM + NP2-ACC transitive verb (J)のように、NP1とNP2に完全な形で助詞を使用するパターンが多く(44.8%)、助詞省略や項省略の使用より使用頻度が高かったが、調査1で多かったBとKのNP2-φのパターンも残存し(21%)、混在している段階である。

最後に、調査3ではBとKのパターンは17%になり、AとJの完全使用のパターンが37.7%、そして、NP1を省略するDとEのパターンが43.4%と急速に増加した。

これらの数値を表に示すと以下ようになる。

表5 文構造ごとの使用率の推移(%)

文構造				調査回数		
主語	目的語	他動詞		調査1	調査2	調査3
NP1-NOM/TOP	NP2-φ	transitive verb	B, K	46.6%	21.0%	17.0%
NP1-NOM/TOP	NP2-ACC	transitive verb	A, J	33.2%	44.8%	37.7%
φ	NP2-φ	transitive verb	E	1.7%	4.8%	26.4%
φ	NP2-ACC	transitive verb	D	0%	0%	17.0%

各文型の習得順序⁷

- ↓ (NP1-NOM intransitive verb)
- ↓ NP1-NOM NP2-φ transitive verb > NP1-TOP NP2-φ transitive verb
- ↓ NP1-NOM NP2-ACC transitive verb > NP1-TOP NP2-ACC transitive verb
- ↓ φ NP2-φ transitive verb
- ↓ φ NP2-ACC transitive verb

表5の結果を上のようにまとめた。NP1に助詞が付き、NP2の助詞が脱落した他動詞文がまず習得され、次いで、助詞を省略させない完全文を用いるようになる。これは文の統語的な操作が可能になり、完全文を産出することができるようになってきている段階である。確かに、調査1の段階でも完全文の産出は多かったが、B、Kのパターンが漸減しているように、このB、Kのパターンの産出は統語的な操作に問題があり、それが解決されていく過程であると考えられる。

次の段階として、EとDのような、NP1を省略するパターンが急増する。これは、学習者

⁷ 5.3.1.で述べたように、NP1-NOM/TOPの項は習得が早いため、自動詞(intransitive verb)は、他動詞(transitive verb)よりは先に習得可能であると予測される。但し、本稿では実証的なデータが得られていないため、()によって予測を示した。

韓国語習得における主語と目的語をマークする助詞と項の省略の非対称性について

が統語的な操作のレベルを超えて、機能的な操作ができるようになったからであると考えられる。即ち、Hinds (1983) のトピック連鎖の伝統的なモデルがL2の使用においても発生し、NP1を省略し、簡略化した文を産出できるようになった段階であると考えられる。

例3は調査3からのものであるが、ここでは初出の1人称以外は後続文では全て省略されている。また、例4では最初から自明であると考えられた1人称を殆ど省略し、混在的に1人称を出現させている。

例3 (調査3) NP1 を省略させたパターン1

저는	언제나	TV를	봐요,	코미디하고	스포츠를	봐요,
私は	いつも	TVを	見ます	コメディと	スポーツを	見ます
공부	안해요,	가끔	영화를	봐요.		
勉強	しません	たまに	映画を	見ます		
매일	아르바이트하다,	하지만	많이	놀아요.		
毎日	アルバイトする	しかし	たくさん	遊びます		

例4 (調査3) NP1 を省略させたパターン2

매일	Bolingo에	가요	그리고	우유를	먹어요.	하지만	신문은	안 읽어요
毎日	ボーリングに	行きます	そして	牛乳を	飲みます	しかし	新聞は	読みません
저는	매일	자요	하지만	별로	소설	안 읽어요		
私は	毎日	寝ます	しかし	別に	小説	読みません		
그리고	영화	별로	안	봐요				
そして	映画	別に	見ません					

例3ではNP2にACCを付けているが、例4ではNP2のACCは付いたり付かなかったりしている。恐らく、この調査3の時点では、このように学習者ごとにNP2の習得にまだ大きな揺れが存在しているためであろう。このNP2がNP1の習得よりも遅れるという事実は先行研究の結果とも一致している。

6. まとめ

以上、縦断的なデータを元にJNSのL2としての韓国語習得を観察してきた。本稿の調査で明らかになったことを表6にまとめた。

表6 学習者の習得過程

段階	統語的操作のレベル		機能的操作のレベル
主要構造	NP1-NOM/TOP > NP2-φ	⇒	φ > NP2-ACC
学習者の状態	統語的負担が大きい		文脈理解の作業が大きくなる
産出の困難点	①NP1 に助詞をつけること ②NP2 を表示すること		①NP1 を省略すること(先行文脈と 結束させること) ②NP2 に助詞をつけること

L1とL2の助詞の連続的な使用が日本語と韓国語で共通しているにも関わらず(Hinds 1983, Hwang 1983)、NP1の位置で空要素を用いるのは初期段階では困難である様子がうかがわれる。NP1には寧ろNOMやTOPを付けたNP1が使用されていた。そして、この段階ではNP2のACCは脱落し、NP1-NOM/TOP+NP2-φの構造が主流であった。これは学習者の内部において、L2を産出する際の統語的な負担が大きいことを意味している。即ち、NP1に助詞を付けるという操作(或いは定型化している可能性もある)、NP2を表示する作業は可能だが、NP2にACCを付けるという統語的な操作が困難な段階であることを意味すると思われる。この段階では、NP1の助詞省略や項省略は文脈や文の理解を難しくするのであろう(例2 参照)。寧ろNP1を表示する方が負荷が少ないようである。習得が進展すると、φ+NP2-ACCの構造が主流になってくる。これは、統語的な操作が容易になり、文脈理解の作業が可能になってきた段階だと考えられる。従って、先行文脈と結束させるためにNP1の項を省略するという現象が発生してくる。そして、統語的に不安定だったNP2にACCを付けるという操作が可能になってくると考えられる。

以上、見てきたように、日本語と韓国語は同じTP言語であり、類似した構造を持つにも関わらず、韓国語習得に際して、JNSは必ずしも機能的な転移を発生させるわけではない。統語的な使用も初期段階では困難であり、その言語使用は統語的な操作のレベルから機能的な操作のレベルへ進展していく過程において過渡期的な構文を使用していることが明らかになった。

7. 今後の課題

本稿は作文資料による調査であるため、NP1-φの使用は観察されなかったが、会話資料に基づいた調査であれば項の省略の前に助詞のφ化の過程が存在した可能性がある。また、産出能力と判断能力は異なっていると指摘されるが、文法性判断テストなどの調査を実施しなかったため、学習者の判断能力の測定はできなかった。今後、会話

による産出データと文法性判断テストを併せて調査し、学習者の習得過程をより深く観察していきたい。また、SP言語の話者がTP言語を習得する場合、例えばENSが韓国語を習得する場合、統語操作レベルから機能操作レベルへの習得過程は、TP言語話者のみではなく、SP言語話者にも当てはまるという結論が出るかもしれない。そのためには、調査範囲をSP言語話者の韓国語習得まで広げていかなければならない。

参考文献

- 斉藤信浩(2006a) 「韓国語習得における主格助詞と対格助詞の省略について——対格型言語の主格卓越性の検証と指導効果の影響を巡って——」『言葉と文化』第7号, pp.213-28,名古屋大学大学院国際文化研究科日本語文化専攻
- 鈴木孝明(2000) 「言語習得における助詞の省略可能性について」『月刊言語』vol. 29.5. pp.98-103,大修館書店
- 中浜優子(2004) 「第二言語としての日本語の物語発話における指示対象のトピック管理のパターン」南雅彦・浅野真紀子(共編)『言語学と日本語教育III』pp. 77-96, くろしお出版
- Chaudron, C., & Parker, K. (1990). "Discourse markedness and structural markedness: acquisition of English noun phrases". *Studies in Second Language Acquisition*,12, pp. 43-64.
- Cho,S., Lee M, O'Grady W., Song M.,Suzuki T., Yishinaga N. (2002). "Word order preferences for direct and indirect objects in children learning Korean." *Jurnal of Child Language*. Vol. 29. pp. 897-909.
- Comrie, B. (1989). *Language universals and linguistic typology: syntax and morphology*. 2nd edition.Oxford: Basil Blackwell.
- Fuller,J., & Gundel,K.(1987). "Topic-prominence in interlanguage". *Language Learnig*, 37, pp. 1-18.
- Givón, T. (1983). *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study*. pp.5-41, Amsterdam: Benjamins.
- Greenberg, J.H. (1966). "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements". In J.H. Greenberg(Ed.), *Universals of language*, pp.73-113. Cambridge, MA:MIT Press.

齊藤信浩

- Li, C., & Thompson, S. (1979). "Third-person pronouns and zero anaphora in Chinese discourse". In T. Givón(Ed.), *Syntax and semantics* (vol. 12, pp. 311-55). New York: Academic Press.
- Jin, H-G.(1994). "Topic-Prominence and Subject-Prominence in L2 Acquisition: Evidence of English-to-Chinese Typological Transfer", *Language Learning*.44, 1, pp. 101-22.
- Hinds, J. (1983). "Topic continuity in Japanese narratives and Japanese conversational interaction". *Discourse Processes* 7. pp. 465-82.
- Huang, C.-T. J..(1984). "On the distribution and reference of empty pronouns". *Linguistic Inquiry*. 15, pp. 531-74.
- Huebner,T. (1983a). *A Longitudinal analysis of the acquisition of English*. Ann Arbor, MI: Karoma.
- Hwang, M. (1983). "Topic continuity and discontinuity in Korean narrative". *Korean Linguistics* 3: pp. 47-79.
- Nakahama, Y. (2003). "Development of referent management in L2 Japanese: A film retelling task". *Studies in Language and Culture*. Vol. XXV No.1 pp. 127-146. Graduate School of Languages and Cultures. Nagaya university.
- Otsu, Y.(1994). "Case-marking particles and phrase structure in early Japanese acquisition". In B.Lust,M.Suner & J.Whitman(Ed.), *Syntactic theory and first language acquisition: Cross-linguistic perspectives*, vol.1. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, pp. 159-69.
- Park, H.(2004). "A minimalist approach to null subjects and objects in second language acquisition". *Second Language Research*. 20, pp. 1-31.
- Polio, C. (1995). "Acquiring nothing?: The use of zero pronouns by nonnative speakers of Chinese and the implications for the acquisition of nominal reference". *Studies in Second Language Acquisition*, 17, pp. 353-77.
- Rutherford, W. (1983). "Language typology and language transfer". In S.M.Gass, & L.Selinker(Ed.), *Language transfer in language learning* (pp. 358-370). Rowley, MA: Newbury House.
- Wakabayashi, S. & Negishi,R.(2003). "Asymmetry of Subjects and Objects in Japanese Speakers' L2 English". *Second Language* vol. 2, pp. 53-73.
- Yanagimachi, T. (2000). "JFL learners' referential-form choice in first- through

韓国語習得における主語と目的語をマークする助詞と項の省略の非対称性について

- third-person narratives”. 『世界の日本語教育』10, pp. 109-28.
- Yuan, B. (1997). “Asymmetry of null subjects and null objects in Chinese speaker’s L2 English”. *Studies in Second Language Acquisition*. 19, pp. 467-97.

